

ステイラマテイ『五蘊論註』翻訳研究（一）

箕 浦 暁 雄

はじめに

本稿は、ヴァスバンドゥ (*Vasubandhu*) の『五蘊論』 (*Pañcaskandhaka*) に対するステイラマテイ (*Shramati*) の註釈書『五蘊論註』 (*Pañcaskandhakavivhāsa*) 冒頭箇所¹の翻訳研究である。チベット自治区に数多くの仏教サンスクリット写本が保管されてきた。そのなかに、『五蘊論』『五蘊論註』両テクストの写本が現存する。『五蘊論』はエルンスト・シュタインケルナーと李宇竹によつて、『五蘊論註』はヨヴィタ・クラマーによつて校訂出版されるに至つた。⁽¹⁾本稿ではこれらを底本とする。

Ernst Steinkellner and Li Xuezhū, *Vasubandhu's Pañcaskandhaka*, Sanskrit Texts from the Tibetan Autonomous Region, No. 4, China Tibetology Publishing House, Austrian Academy of Sciences Press, Beijing-Vienna, 2008.

Jowita Kramer, *Shramati's Pañcaskandhakavivhāsa Part I: Critical Edition, PartII: Diplomatic Edition*, Sanskrit Texts from the Tibetan Autonomous Region, No. 16, China Tibetology Publishing House, Austrian Academy of Sciences Press, Beijing-Vienna, 2013.

説一切有部アビダルマならびに瑜伽行唯識学派の思想史上、『五蘊論』をどのように位置付けることができるか。また、『五蘊論』をステイラマティがどのように受けとめているのかを確かめることによって、ステイラマティという註釈者に迫りたい。『五蘊論註』の記述を丁寧に見ると、アビダルマ文献で思索されてきたことを丁寧に受けとめているステイラマティの姿が浮かび上がってくる。

ステイラマティ『五蘊論註』（冒頭）和訳

仏陀に帰命します。

1 造論の意趣

五蘊を初めとする論が企てられたが、それは法の自〔相〕共相を理解するためである。⁽²⁾しかし、『瑜伽師地論』などの諸論で、法の相はすでに確定されているのに、再度その確定に努力することは無意味ではないのか。否、無意味ではない。要約により理解する者に対する教化を願うからである。要約により理解する者は、単なる一例によってそのあり得べき差異を余すことなく了解することができるから、実に略説をこそ評価し詳説を〔歓迎しない〕、またそれゆえに、簡略を喜んで受け入れる衆生に恩恵を与えるために、この論を企てたのである、と。あるいはまた、在家者たちは多くの仕事に従事するから、詳細なテキスト〔の理解〕に専念することができず、また、作意することに専念する出家者たちもまた詳細なテキスト〔の理解〕に専念するときには実に〔心が〕散乱するから、その〔在家と出家〕両者が法相を理解するためにこの論においては法相を要約して説くのであって、その企ては無意味ではない。あるいはまた、簡略にして法相を理解する人は、努力することなく法相の詳細を了解する能力ある者となる。だから、『瑜伽師地論』など〔諸論〕の詳細なテキストへの入口であるこの論は、師〔ヴァスバンドウ〕によって著されたの

である、と。

そのうえ、師が法相の説示を重んずるのは、法相を理解しないでは何が成就しないからなのか。心一境性と、議論の決定⁽⁴⁾における問いと答えに精通すること⁽⁵⁾とである。というのは、法相を熟知する者には疑いがないから、望むがままに所縁に心が集中することになり、それ以外ではない。また、法相を判定することから、慧が勝れているということになるがゆえに無畏を獲得する⁽⁶⁾。そして無畏は、議論の決定についての一切の問いと答えとを示すことができるのであり、それ以外ではない⁽⁷⁾。

2 五蘊についての総説

(一) 蘊の数

五蘊というのは、「五より」少ないのも多いのも認めないことによる数の決定なのである⁽⁸⁾。区別なく蘊という語を使用することから、有漏や無漏の蘊だとの言及がある。蘊は五つのみであり、「五より」少なくとも多くもない。我・我所だと捉える事態を示すためである⁽⁹⁾。というのは、概して愚か者たちの場合、識のみに対して我の把握があり、残る色などに対して我所の把握がある。たとえば、外的・内的な色は道具あるいは目的(行為の対象)になることによつて我と結合するから色蘊に対する我所の把握がある。浄・不浄なる諸々の業の異熟(果)である受があり、そしてそれ(受)を自己が知覚するから受蘊について我所の把握がある。そのなかで、楽の感受は、諸々の浄なる業の異熟(果)である。苦(の感受)は、諸々の不浄なる業(の異熟果)である。不苦不楽(の感受)は、「浄・不浄」両者の(業の異熟果)である。またここで、アーヤ識と相応する捨(不苦不楽)⁽¹⁰⁾のみが、勝義としては業の異熟(果)なのである。アーヤ識は浄・不浄なる業の異熟(果)だからである。しかし、楽と苦とは異熟から生ずるから、異熟という仮説がある⁽¹¹⁾。見られた(見)・聞かれた(聞)・考えられた(覚)・認識された(知) 諸々の意味に対し

て自己に想を媒介として言語習慣が生起するから、想蘊について我所の把握がある¹²⁾。善・不善などに対して、諸行によって自己と考える心が起こるから行蘊について我所の把握があるがゆえに、蘊は五つのみである

(2) 蘊の順序

さて、なぜ諸蘊は、他ならぬこのような順序なのか。すなわち粗雑なものから「精細なものへの順序」である。そのなかで、色は「他の法と」牴触するものだから、すべてのなかで「最も」粗雑であり、五識身の所依であるから、六識の境であるから、ゆえに最初に粗雑な色が説かれているのである。受は、「色に次ぐ、受想行の」三つのうち現れ方が粗雑であるという点でより粗雑なのである。というのは、「それが現れる」場所を欠くにもかかわらず想などのように現れ方が粗雑であるから、場所を判定するという点で、それ(受)のみについて「私の手に受がある。私の頭に受がある」と「一般に」言うのであって、想などについてはない。ゆえに、色の直後に説かれている。二つのうちより粗雑である想とは表象因の把握を本質とすることによってよく認知されているからである。識よりも諸行はより粗雑であって、形成するものという性質によって楽の認知があるからである。すべてのなかで「最も」微細であるから、識は最後に説かれている。

註

(1) 『五蘊論』『五蘊論註』写本については、PS Steinkeller and Li ed. *PSVibh Kramer ed.* ならびに Kramer (2014) 参照。チベット語訳からの英訳は、Engle (2009) を参照。瑜伽行唯識学派における『五蘊論』の位置付けに関するクラマーの理解については、Kramer (2015) 参照。

(2) prakaraṇa (rab tu byed pa) の語がどれほどの意味で用いられているかについては、主として次のような先行研究がある。山口益・野澤静證「一九五三—一三六一—三九頁、福田琢「二〇〇五」、横山剛「二〇一四」参照。チベット語訳において、

礼賛の言葉の後に通例に従って記される題目は次の通りである。北京版：「インド語では『Pañcaskandhaprakaraṇavibhāṣyam』(*Pañcaskandhaprakaraṇavibhāṣya) である。チベット語では『Phung po ngai rab tu byed pa bye brag tu bshad pa』である。」* 北京版とワルゲ版とで音写表記に若干の相違あり。

- (3) 論を著す目的は法の自相・共相を理解するためであるとの言及は、幾多の論書にも見られる。つまりこの『五蘊論註』を著したステイラマティによる『俱舍論』註釈書 (*Tattvathā*) の記述を参照するなら、以下の通りである。TA Peking To 4a4-5, Derge Tho 3b1-2, bcos rtson pa'i dgos pa ci zhe na / chos nams kyi rang dang sbyi'i mshan nyid rtogs pa ni dngos kyi dgos pa dang mya ngan las 'das pa thob pa yang dgos pa yin pai bar du'o // x'o-s'i' 論を造る目的は何か。諸法の自(相)と共相を理解することがまことの目的であり、また涅槃を証得するにいたることも目的である。

論の目的について、TA はさらに、法の判定 (*dharmaprativāya*) によって煩惱を断じ、そのことによって輪廻からの解脱を得ることになるのだと言及した後、『大毘婆沙論』とこう論がすべてにあるけれども『俱舍論』を著すことは無用でなくとこう趣旨の註釈を付す。TA Peking To 4bs-5, Derge Tho 3b6-4a1: bstan bcos bye brag tu bshad pa la sogs pa dang dgos pa mtshungs na de nams las llag par rtson pa dgos pa med pa ma yin nam zhe na / bye brag tu bshad pa la sogs pa pa nrams la rgyas pa dang ndor bsduṣ pa dang 'khrugs ba la sogs pa'i skyon mthong ste yongs su mgu bas dgos pa mang ba dang rgya cher shes pa dang dge pai blo can nrams la phan gdags pai phyir rgyas pa dang ndor bsduṣ pa dang 'khrugs pa ma yin pai tshig don nye bar bstan pa chos mngon pa dang ches nye ba chos mngon pai mdzod ces bya ba btsams so // de'i phyir di rtson pa dgos pa med pa ma yin no / 『ヴィバーシヤ』 (*Vibhāṣā* 『大毘婆沙論』) などの論と目的が同じであるならば、それらの他にさらに〔論を〕造る目的はないのではないか。『ヴィバーシヤ』など〔の論〕には、詳細であったり簡略であったり混乱するなどの難点が見られる(ので)、多様な目的を十全に知り、善なる慧を持つ者たちに利益するために、詳細であるとか簡略であるとか混乱することのない語の意味を明示するアビダルマにより近い『アビダルマコーシヤ』 (*Abhidhamakosa* 『俱舍論』) を造ったのである。それゆえに、この〔論を〕造る目的がないわけではない。

こうしたことは、『俱舍論』に先立つ『雜阿毘曇心論』冒頭でも宣言されている。『雜阿毘曇心論』卷第一「大正藏二十八869c12-14, 16-17」或いは極めて総略なる有り 或いは復た廣きこと無量なり 是くの如きの種種の説 修多羅に順わず

光顕にして善く随順するは 唯だ此の論を最と爲す」¹「極めて略なるは解知し難く 極めて廣なるは智をして退せしむ 我今中に處して説き 廣説の義もて莊嚴す」²。ここには次の割註が付されている。「廣説は梵音に毘婆沙と云う。毘婆沙の中の義を以て處中之説を莊嚴す。諸師の法勝阿毘曇心の義を釋すに廣略同じからず。法勝の釋す所最も略と爲すなり。優婆扇多に八千偈の釋有り。又一師に萬二千偈の釋有り。此の二論名づけて廣と爲すなり」³。さらに「雜阿毘曇心論」卷第一「大正藏二十八 869c27-28」は「大徳法勝及び我達磨多羅は共に雜阿毘曇心を莊嚴し諸の廣略を離れて眞實義を説く」と説明する。ステイラマティは「このように繰り返し語られてきた造論の意趣を受けとめて、『五蘊論』立論の意味を伝統に従った態度で的確に述べていることになる。

- (4) 『阿毘達磨集論』は「決擇」には「一諦決擇 (satya-viññāya)」、⁴ 法決擇 (dharma-viññāya)」、⁵ 得決擇 (prāpū-viññāya)」、⁶ 論議決擇 (sāṃkathya-viññāya)」の四種類があると述べて順に説明を始める。対応箇所：AS Gokhale ed. 3017. Pradhan ed. 362 『阿毘達磨集論』卷第三「大正藏三十一 674a4-5」ASBh Tatia ed. 欠：ASVy. Peking. Śi. 214b1 <ASVy は他々訳語が異なり論議決擇の箇所は yang dag pai gram man nges རྩམ་པའི་གྲམ་མའ་མཆོ་ཤོ་ Derge Li 178b5 『阿毘達磨雜集論』卷第六「大正藏三十一 719a24-25」そのなかの論議決擇は *nyāyā* に「一義決擇 (artha-viññāya)」、⁷ 釋決擇 (vyākhyā-viññāya)」、⁸ 分別顯示決擇 (prabhidyasaṃdarsana-viññāya)」、⁹ 等論決擇 (samprāsna-viññāya)」、¹⁰ 攝決擇 (saṃgraha-viññāya)」、¹¹ 論軌決擇 (vāda-viññāya)」、¹² 祕密決擇 (abhsandhi-viññāya)」の七種類に分けて説明される。cf. AS Pradhan ed. 102.18-20. AS Tib Peking Li 138a8-138b1. Derge Ri 117a6-7 『阿毘達磨集論』卷第七「大正藏三十一 693a9-11」

他方、経律論の定立について説く際に、論議決擇によって受用法樂があることを根拠にアビダルマの定立がなされと言及する。AS Pradhan ed. 802-3. jānānām sāṃkathya-viññāyadharmasambhogasukhavihārāśrayatām upādāya abhidharmapiṭakavyavasthānam / 智者たちは論議の決定による法を享受することによって樂に住することによって依ることによってアビダルマの藏の定立がある。AS Tib Peking Li 121a5-6. Derge Ri 102a3. bel bai gram gyis gran la bebs pas chos la rdzogs par longgs spyod pas bde ba la reg par gnas par bya bai phyir / chos mngon pai sde snod man par gzhang go // 『阿毘達磨集論』卷第六「大正藏三十一 686c11-12」爲令智者論議決擇受用法樂住故 建立阿毘達磨藏。この点にごくつ、ASBh は「アビダルマによって相互に論議の決定をなすことと法を享受することにより心地良々に住することになる。そ

のなかで、多くの種類の諸法の自相を初めとする法性によって解説するからである」と述べる。ASBh Tatia ed. 97.10-12: abhidhammā nisīṭṭya paraspāram sāmīkathāviniścayakṛitena dharmasamhogena sparśavīhāro bhavati tattra bahuprakāraṇaṃ dharmānāṃ svalakṣaṇādīdharatāyā vyūpādānāt / ASVy Peking śī 285.88-286a2. Derge Lj 234b3-4: chos mngon pa la brten nas phan tshun yang dag pa'i gram gyis gran la 'pebs par byed pa na chos la rdzogs par longs spyod par bde ba la reg par gnas par 'gyur te / der chos rnam pa mang po rnam kyī rang gi mtshan nyid la sogs pa'i chos nyid la byang bar byed pa'i phvir ro // 『阿毘達磨雜集論』卷第十一【大正藏三十一 744b17-20】令智者論議決擇受用法樂住故建立阿毘達磨藏。依止此藏諸有智者，更相問答論議決擇受法樂住。由此藏中以無量門開示諸法自相共相等真實法性故。「智者をして論議決擇し法を受用し樂住せんが故に、阿毘達磨藏を建立す。此の藏に依止する諸の智を有する者、更に相い問答し論議決擇し法を受け樂住す。此の藏の中に無量の門を以て諸法の自相共相等の眞實の法性を開示するに由るが故なり。」

よらに、〈作意稱讚利益〉〈論議決擇稱讚利益〉についての言及を参照のこゝ。ASBh Tatia ed. 1.5-13: kimartam idam sāstram ārabdhān / skandhān ārabhya kati kasmād ity evamādiṣu cintāsthāneṣu kauśalyakaraṇārtham / tathā hy anena kauśalyena divividho 'nūsānso labhyate — manaskārānūsānsaḥ sāmīkathāviniścayānūsānsaś ca / tattra manaskārānūsānsaḥ, śamathānukūyād vipāśyanāvṛddhyānukūyāc ca vedīṭṭavyāḥ / śamathānukūyaṃ punar eṣu sthāneṣu kṛtākauśalya nihsamīdenatāyā yathēṣṭān ālāmbana aikāgryavogena sukham cittasamādānataḥ / vipāśyanāvṛddhyānukūyaṃ bahubhiḥ prakārair jñeyaparīkṣayā prajñāprakārasāgamānataḥ / sāmīkathāviniścayānūsānsa eṣu sthāneṣu kauśalya sarvaprāśnavyākaraṇa, aśaktiyogād vaiśaradyapratīlanbhato draśṭavyāḥ // 「何のためにこの論は企てられたのか。蘊などについて「何種類か、何故か」云々などと思惟の主題について巧みにさせるためである。というのは、この巧みなるによって二種の福利が得られる。〈作意稱讚利益〉と〈論議決擇稱讚利益〉とである。そのなかで、〈作意稱讚利益〉とは、止に随順するがゆえにまた観の増長に随順するがゆえにであると知られるべきである。さらに、止に随順するとは、これらの主題について巧みとなった者には、疑いを抱かずに望むがままに所縁に一点集中することによって快く心の集中があるからである。観の増長に随順するとは、多くの仕方によって知られるべきこと考察によって慧の卓越さが得られるからである。〈論議決擇稱讚利益〉とは、これらの主題について巧みな者は一切の問いと答への力を具えるから、無畏が獲得されるから、と認められるべきである。」阿毘達磨集論研究会【二〇一五】参照。加えて、『阿毘達磨雜集論』卷

第一「大正蔵三十一 695a8-15」が言及する〈作意稱讚利益〉(論議決擇稱讚利益)を参照のこと。なぜ蘊などについて分析

するのかの問いを立て、それは思釈において善巧を獲得させようとするからであると言う。そしてこの善巧によって「作意稱讚利益」(論議決擇稱讚利益)という二種の稱讚利益を得ることになると説く。「作意稱讚利益は、謂わく善く奢摩他毘鉢舍那に順い增長するが故なり。善く奢摩他に順い增長するは、謂わく是くの如き諸の思擇の處に於いて、已に善巧を作し、疑無きことを得るが故に、其の所樂に隨い、一境界に於いて正觀現前し、心定め易きが故なり。善く毘鉢舍那に順い增長するは、無量の門を以て、一切所知の境界を觀察し、速やかに正慧をして究竟して滿たしむが故なり。論議決擇稱讚利益は、是くの如き諸の思擇の處に於いて、善く通達するが故に、一切の問答自在を成就し、諸異論に於いて無所畏を得るなり。」対応箇所 ASVy Peking Śi 145a3-7, sDe dge Li 118b3-6、参照。

またさらに、八正道の正語にいう言及する箇所は、ASBh は「正語による所證にむわしい問いと答えという論議の決定によつて、これが見の清淨であると識知される」と述べ⁹⁸。ASBh Tatia ed. 89:21-22, tatra samyagvācādhigamanur-paprasnavākaranasāmkathyaṅviniscayaṇa darsanavīuddhir vijāyate /; ASVy Peking Śi 276b5-6, Derge Li 227b4: de la yang dag pai ngag gis ni rtogs pa dang / 'dri ba dang / lung ston pa 'bel bai gñam gñan la 'bebs pas / de'i lta ba mnam par dag par mnam par shes so // 『阿毘達磨雜集論』卷第十 [大正蔵三十一 741a10-11] 由正語故隨自所證、善能問答論議決擇。由此了知有見清淨。「正語に由るが故に自らの所證に隨い、善く能く問答し論議決擇す。此れに由りて見に清淨有ることを了知す。」

ステイラマティによる『中辺分別論』の註釈は、八正道の正語について次のように言及する。『中辺分別論』第四章「対治修習品」本論と共に示す。MaVBh Nagao ed. 54:15-16, Tatia and Thakur 32:19. tasya samyagvācā kathāsāmkathyaṅviniscayaṇa prajñāyān sambhāvanā bhavati / 之の善くは、正語を以て、説くことと論議の決定にむわしい、慧にむわしいの信知があることを示す。MaVBh Peking Bi 21a7, Derge Bi 17b5: yang dag pai dag gis bnyad pa dang / 'brel pai gñam mnam par nges pas shes rab la yid ches par 'gyur ro // 女装訳『弁中辺論』卷中 [大正蔵三十一 472b18] 謂由正語論議決擇令他信知已有勝慧。真諦訳『中辺分別論』卷下 [大正蔵三十一 459a23-25] 依正言說言語共相難正義共思擇義時、他得信是人有智。是故令他信智。MaVT Pandeya ed. 138:1-4, Yamaguchi ed. 183:16-21: samyagvāceti vistaraḥ / kathi dharmadēsana / sāmkathyaṅviniscayaḥ parāḥ sahbhisamayan ārabhya codyaparāhākrīyā / anena kathāsāmkathyaṅviniscayaṇa prajñāyān

sambhavana bhavati paresaṃ nityogad anena tattvan adhiḡatan tatha hy upasamasanaktam suviniścitāviruddhartham sphuṭārtham vacanam idam it / 正語によつて云々。説くことは法の説示である。論議の決定とは、他の人々との現観についての論難と回答の作用を持つものである。この説くことと論議の決定とによって、確実に、この者によって真実が證されたと、他の人々に慧についての信知があることになる。というのは、これは執着の寂滅であり、よく決定されていて相反しない意味を持つものであり、明瞭な意味の語であるからである。Peking Tshī 125a2-4, Derge Bī 278b4-6

『論議決擇』の語の説明は、グナマティの『釈軌論註』に見られる。堀内俊郎「二〇〇九」三五九頁参照。「論議決擇」のなかの「義決擇」とそれに続く議論については、本庄良文「一九八九」、石川美恵「一九九七」「一九九八」「一九九九」参照。こうした釈尊の言葉の意味決定がいかに重要なことであるかをこれらの言及を通して受けとめておく必要がある。

(5) 『俱舍論』第五章「随眠品」では、經典の十四無記についての言及を契機として、〈問いと答え〉の考察そのものに向かう。〈問と〉は次の四種類に分類される。(1) 一向記 ekāṃsa-vyākaraṇīya (2) 分別記 vibhāya-vyākaraṇīya (3) 反詰記 pariṇcchya-vyākaraṇīya (4) 捨置記 śhāpanīya-vyākaraṇīya として、問と (praśna) と答え (vyākaraṇa) との特性 (lakṣaṇa) は、他ならぬ経により確かめられるべきである。小谷信千代・本庄良文「二〇〇七」九五―九九頁参照。この『俱舍論』における教学上の整理の重要性は、R・G・コリングウッドの指摘からも確かめておくことができる。すなわち、真理とは「問題と解答とからなる複合体に属する何ものか」であつて、「問題に対する「正しい」解答とは、問答活動のプロセスにおいて私たちを前進させてくれる解答」(コリングウッド「一九八一」四七頁)なのである。

(6) 慧と無畏との関係についての言及は、『俱舍論』第八章「智品」に見られるような理解に基づくものと考えておけばよい。こゝは、智そのものが無所畏であると主張するヴァイバーシカの主張に対して、智によって無所畏が造られるという見解を述べる箇所である。AKBh Pradhān ed., 414.7-8; katham jñānam eva vaiśārdyam / nirbhayata hi vaiśārdyam / ebhiś ca nirbhayo bhavati / jñānakṛtam* vaiśārdyam. yujyate / na jñānam eva / (*SA Woghara ed. 646.29, 646.33; jñānakṛtam tu) どのようにして智こそが無所畏であるのか。と云うのは無所畏とは畏れがなむことであるからである。けれども、これら「諸々の智」によって畏れないことになるのである。無所畏が智によって造られるというのは道理にあつて。智こそが「無所畏の」ゆへなむ。AKBh Peking nGu 65a7-8, Derge Khu 57a1-2 女塾訳 卷第二十七「大正蔵二十九 140c21-24」真諦訳 卷第二十「大正蔵二十九 291c27-292a1」

(7) 例えば『俱舍論』卷第二十七〔大正藏二十九 140c17-24〕や『瑜伽論』卷第五十〔大正藏三十 573b20-573c18〕などに

見られる仏の四無畏（正等覺無畏・漏永盡無畏・說障法無畏・說出道無畏）の説明のなかでは、『五蘊論註』のこうした「論議決擇」に関する言及は見られない。このような言及は『大智度論』『自在王菩薩經』『自在王菩薩經』に見られる菩薩の四無所畏として語られる脈絡と合致するのであろうか。検討を要する。『大智度論』は、仏にある十力・四無所畏が菩薩にもあるのかとの問いを立てる。その言及のなかで、問い正そうとする人たちに對して答えることで疑惑を断じ、大衆のなかにあつて説法して畏れることがないことを菩薩の四無所畏の一つとして述べている。菩薩の四無所畏については、『大智度論』卷第二十五〔大正藏二十五 245c26-246a22〕『自在王菩薩經』卷下〔大正藏十三 932c27-933a7〕（両者「鳩摩羅什譯」との伝）参照。また、この点については Oberhammer 2006, Todeschini 2011 参照。

(8) AKBh Ejima ed., 241f.; Pradhan ed., 151f-17; ata eva pañca skandhā nāpiyānso na bhūyānsaḥ // 430c11のゆえに、
ata eva ca pañca skandhā nāpiyānso na bhūyānsa iti yathaudarikādbhīh karanāir nāpiyānso na bhūyānsa ity arthah /
またこのゆえに、蘊は五つであり、より少なくもなく多くもないとは、粗大などの原因によつてより少なくもなく多くも
ないという意味である。(TA 註釈は SA とは同)。cf. TA Peking To 94b4-5, Derge Tho 78b5-6 蘇軍 一九三一一九
四頁)

(9) 仏教における五蘊についての言説がまぎれもなく苦悩の問題を除外して理解されてはならないことをこの一節は示唆している。五蘊は苦悩の問題を抜きに定立される存在概念ではない。ところで、例えば『大毘婆沙論』卷第五十六〔大正藏二十七 T288a11f〕には vastu (事態) の意味の分節が示される。1 自体事、2 所縁事、3 繫事、4 因事、5 攝受事。『俱舍論』(AKBh Pradhan ed., 932f) および『俱舍論実義疏』[TA Peking To 44a6f, Derge Tho 37a2f] 対応する『俱舍論実義疏』古代ウィグル文については庄垣内正弘〔二〇〇八〕四四四―四五一頁参照。『俱舍論明瞭義』[SA Wogihara ed., 21:28f] にも同様に五つの意味についての言及がある。1 自性としての事態 (svabhāva-vasu) 、2 所縁としての事態 (alanbana-vasu) 、3 繫縛としての事態 (samyoga-vasu) 、4 因としての事態 (hetu-vasu) 、5 攝受としての事態 (parigraha-vasu) 。岸上仁〔二〇一五〕が指摘する通り、『瑜伽師地論』菩薩地「真実義品」において vastu の概念が登場する議論を通して、
vasu は我々の認識に左右されない何らかの超越的・絶対的存在あるいは我々の認識に左右されない外界の何らかの物体を

想定するのではなく、苦悩の存在たる人間にとつて（真の認識）の探求という問題意識のなかにおいてはじめて登場する実在概念と言わなければならぬ。

(10) チベット語訳は「受」の語を補う（*tshor ba bhang snyom*）。

- (11) 以下に平行句を記す。イタリック体は一致する箇所であることを示す。TrBh Boescher ed. 56.16-21, Levi ed. 20.18-23: *evam tv anye manyate / subhāsūbhānāṃ karmaṇāṃ phalavipākāṃ pratyambhavanṭy aneṭy anubhavaḥ / katra subhānāṃ karmaṇāṃ subho 'nubhavaḥ phalavipākāḥ / aśūbhānāṃ duḥbhāḥ / ubhayeśāṃ aduḥkḥasubhāḥ / atra cālayavijñānaṃ eva subhāsūbhakarmavipākāḥ. / tatsampṛvyuktavipokṣa poramārtahatāḥ subhāsūbhānāṃ karmaṇāṃ phalavipākāḥ / subhādubhavyo tu kusālakusālakarmavipākajātavā vipākopacarah / cf. TrBh Peking Si 176a2-6, Derge Śi 151a5-7, ASBh Tatia ed. 2.13-16: śūbhānāṃ karmaṇāṃ subho 'nubhavaḥ phalavipākāḥ / aśūbhānāṃ duḥbhāḥ / ubhayeśāṃ aduḥkḥasubhāḥ / tathā hi subhānāṃ asubhānāṃ vā vipāka ālayavijñānaṃ nityam upekṣayaiva sampṛvyuktāṃ bhavati saiva cātropokṣa vipākāḥ. subhādubhavyo tu vipākajātavā vipākopacarah / 『大乘阿毘達磨雜集論』卷第一〔大正藏三十一 695c1-6〕問。受蘊何相。答。領納相是受相。謂由受故領納種種淨不淨業所得異熟。若清淨業受樂異熟。不清淨業受苦異熟淨不淨業受不苦不樂異熟。所以者何。由淨不淨業感得異熟阿頼耶識。恒與捨受相應。唯此捨受是實異熟體。苦樂兩受從異熟生故。假說名異熟。阿毘達磨集論研究会〔二〇一五〕参照。*
- (12) cf. ASBh Tatia ed. 2.16-19: *dṛṣṭāśrūtatanavijñātāṃ arthāṃ itī / dṛṣṭāṃ yac caksusānubhūtaṃ, śrūtaṃ yac chrotreṅānubhūtaṃ, matāṃ yat svayaṃ abhyūhitaṃ evaṃ caivāṃ ca bhavitavyaṃ itī, vijñātāṃ yat pratyātmanānubhūtaṃ itī / vyavaharitṭy abhīlāpaḥ, prāpayaṭṭy arthāḥ // nānāvasthāsu ceti sukhaduhkhādṛyāsu //*「見聞覚知された意味を」と「云々」。見とは眼によつて享受（感受）されたものであり、聞とは耳によつて享受されたものであり、覚とは「これこれであるだろう」と自ら考えられたものであり、知とは各々に享受されたものである。言語表現するとは、言葉で理解させるといふ意味である。阿毘達磨集論研究会〔二〇一五〕参照。

略号

AKBh. Abhidharmakośabhāṣya

- Ejima, Yasunori, ed., *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu Chapter I: Dhātuvirtdeśa*, Bibliotheca Indologica et Buddhologica I, Tokyo: Sankibo Press, 1989.
- Pradhan, P., ed., *Abhidharmakośabhāṣya*, Tibetan Sanskrit Works Series Vol. VIII, Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1967.
- AS.
- Abhidharmasamuccaya
- Gokhale, V. V., ed., Fragments from the Abhidharmasamuccaya of Asaṅga, *Journal of the Royal Asiatic Society*, New Series Vol. 23, 1947.
- Pradhan, P., ed., *Abhidharma Samuccaya of Asaṅga*, Visva-Bharati Studies 12, Calcutta: Visva-Bharati Santiniketan, 1950.
- ASBh.
- Abhidharmasamuccayabhāṣya
- Tatia, N., ed., *Abhidharmasamuccayabhāṣyam*, Tibetan Sanskrit Works Series Vol. XVII, Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1976.
- ASVy.
- Abhidharmasamuccayavyākhyā
- Peking No. 5555, Derge No. 4054.
- Derge.
- འཛིན་པོ་ལྷན་པོ་འབྲེལ་པུ་ཆེན་གྱི་འཕྲིན་ལེན་
- MAVBh.
- Madhyāntavibhāṅghāṣya
- Nagao, Gadjin, ed., *Madhyāntavibhāṅghāṣya* (《大乘中觀論疏》一九六四年)
- Tatia, Nathmal and Thakur, Anantal, ed., *Madhyāntavibhāṅghāṣyam*, Tibetan Sanskrit Works Series Vol. X, Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1967.
- MAVT.
- Madhyāntavibhāṅgāṭkā
- Pandeya, Ramachandra, ed., *Madhyāntavibhāṅgāśāstra: Containing the Kārikās of Maitreya, Bhāṣya of Vasubandhu and Tika by Shivamati*, Delhi: Motilal Banarasiadas, 1971.
- Yamaguchi, Susumu, ed., *Madhyāntavibhāṅgāṭkā: exposition systématique du Yogācāra-vijñāpitrūḍa*, Nagoya:

- Librairie Hajinkaku 1934.
 北京版チベット大蔵経
- Peking.
 北京版チベット大蔵経
- PS.
 Pañcaskandhaka.
 Li, Xuezhu and Steinkellner, Ernst, ed., *Vasubandhu's Pañcaskandhaka, Critically edited by Li Xuezhu and Steinkellner with a Contribution by Toru Tomabechi*, Sanskrit Texts from the Tibetan Autonomous Region No. 4, Beijing: China Tibetology Publishing House, Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2008.
- PSVibh.
 Pañcaskandhakavibhāṣā.
 Kramer, Jowita, ed., *Shiramat's Pañcaskandhakavibhāṣā Part I: Critical Edition*, Sanskrit Texts from the Tibetan Autonomous Region No. 16, Beijing: China Tibetology Publishing House, Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2013.
- SA.
 Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā.
 Wogihara, U., ed., *Sphuṭārthā, Abhidharmakośavyākhyā*, Tokyo: Sankibo Buddhist Book Store, 1936.
- TA.
Tatvārthā Abhidharmakośabhāṣyaṭīkā.
 Peking No. 5875, Derge No. 4421.
 蘇軍「敦煌本安慧 阿毘達磨俱舍論美義疏 發現漢訳新本」『佛学研究』中国佛教文化研究所学報、一九九三年（阿毘達磨俱舍論美義疏）方廣鋈主編『藏外佛教文獻』第一輯、宗教文化出版社、一九九五年、一七〇—二五〇頁再録）
- TrBh.
Trīṃśikāvijñaptibhāṣya.
 Buescher, Hartmut, ed., *Shiramat's Trīṃśikāvijñaptibhāṣya: Critical Editions of the Sanskrit Text and its Tibetan Translation*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2007.
 Lévi, Sylvain ed., *Vijñaptimātratsīdhi: deux traités de Vasubandhu. Vīṃśatikā (La vingtaine) accompagnée d'une explication en prose, et Trīṃśikā (La trentaine) avec le commentaire de Shiramati*, Paris: Librairie Ancienne Honoré Champion, 1925.
- 大正蔵
 大正新修大蔵経

文献

- 阿毘達磨集論研究会 [二〇一五]「梵和訳『阿毘達磨集論』(一)」『インド学チベット学研究』第一九号
- 石川美恵 [一九九七]『決定義経註 (Don rnam par gdon mi za bai 'grel pa)』序文研究・校訂・和訳・注解―『東洋学研究』第三四号
- [一九九八]『決定義経釈 (Don rnam par gdon mi za bai 'grel pa)』第一章研究―「如是我聞一時」「世尊」の解釈―『東洋大学院紀要』二五集
- [一九九九]『決定義経釈 (Don rnam par gdon mi za bai 'grel pa)』研究―第一章「処円満・眷属円満」、第二章「決定義経」の説かれた発端―『東洋大学院紀要』二六集
- 小谷信千代・本庄良文 [二〇〇七]『俱舍論の原典研究―随眠品』大蔵出版
- 岸上仁 [二〇一五]「初期唯識思想において vasu 的概念がもたらした問題―説一切有部の議論をふまえて『菩薩地』『真実義品』を考察する―」『仏教学セミナー』第一〇一号
- コリングウッド R・G [一九八一]『思索への旅―自伝』(玉井治訳) 未来社
- 庄垣内正弘 [二〇〇八]『古代ウイグル文アビタルマ論書の文献学的研究』松香堂
- 福田琢 [二〇〇五]『施設論』『品類足論』の原題について―『長崎法潤博士古稀記念論集』仏教とジャイナ教』平楽寺書店
- 堀内俊郎 [二〇〇九]『世親の大乗仏説論―『釈軌論』第四章を中心に―』山喜房佛書林
- 本庄良文 [一九八九]『梵分和訳 決定義経・註』京都・私家版
- 山口益・野澤静證 [一九五三]『世親唯識の原典解明』法藏館
- 横山剛 [二〇一四]『「入阿毘達磨論」の原題に関する考察―蔵訳仏典が伝える書癡中の“rab tu byed pa” (prakaraṇa) の意味をめぐって―』『日本西蔵学会々報』第六〇号
- Engle, Artemus B. (2009). *The Inner Science of Buddhist Practice: Vasubandhu's Summary of the Five Heaps with Commentary by Shriramati*. New York: Snow Lion Publications.
- Kramer, Jowita. (2014). *Indian Abhidharma Literature in Tibet: A Study of the Vijnana Section of Shriramati's Pancaskandharvibhāṣā, Buddhism Across Asia: Networks of Material, Interhall and Cultural Exchange, Volume 1.*

Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

——— (2015). Innovation and the Role of Intertextuality in the *Pañcasakandhaka* and Related Yogācāra Works. *Journal of the International Association of Buddhist Studies* Volume 36/37, 2013/2014 (2015).

Oberhammer, Gerhard, Ernst Prets, and Joachim Prandstetter. (2006). *Terminologie der frühen philosophischen Scholastik in Indien: Ein Begriffswörterbuch zur altindischen Dialektik, Erkenntnislehre und Methodologie*, 3 vols. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1991, 1996, 2006.

Todeschini, Alberto. (2011). On the Ideal Debater: *Yogācārabhūmi, Abhidharmasamuccaya and Abhidharmasamuccayabhāṣya*. *Journal of Indian and Tibetan Studies* (『インド・チベット学』) 15.